

2026年(令和8年)

第98号

(6月4日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 澤村悦玄
 編集委員長：渉外広報 植田恭司
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

粟田神社御鎮座壹千百五十年 式年大祭 並びに 記念式典



粟田神社御鎮座壹千百五十年 式年大祭 並びに 記念式典が5月2日午後1時から粟田神社境内で開催され、地元である京都教会からも東教会長が参列しました。

同神社は平安時代、清和天皇貞観十八（876）年に創建し、今年は1150年の記念の年にあたります。式年は50年毎に大祭が行なわれてきたようで、八坂神社や知恩院など地元を代表される方々が多く参列されました。佐々貴敏道 宮司の祝詞奏上、玉串奉奠（たまぐしほうてん）の後、参列者代表の玉串奉奠と続き、東教会長も参列者の一人として玉串を奉り、拝礼を行いました。



初夏を感じるような晴れやかな天候のもと、約1時間の式年大祭は厳粛に執り行われ、引き続き記念式典が開催されました。佐々貴宮司は挨拶の中で、創建当時は京都には飢饉や疫病や戦乱があったとされ、人々の救いを求めて作られた神社であったと、同神社の由来についてふれました。こうして創建1150年を迎えるにあたり、多くのご寄付を頂いたと感謝の意を述べながら、これからもご協力・ご協賛頂きたいと結びました。

粟田神社清々会の会長である佐竹力總氏(美濃吉 10代当主)は、50年毎の大祭を無事開催出来たと、歴史を繋ぐことが出来たことへの感謝の言葉を述べました。

記念事業の報告には“手水舎（てみずや）”を新調したことがあり、境内に鍛冶神社（粟田口の刀工、三条小鍛冶宗近・粟田口藤四郎吉光と、作金者（かなだくみ）の祖である天目一箇神を祀る鍛冶の神様）があることから、独特な形で奉納出来たとしました。



午後3時からは境内の神楽殿において奉納狂言があり、「福の神」「粟田口」の2つの演目が披露されました。夕方からは会場をウェスティン都ホテル京都 葵殿に変え祝賀会を開催、1150年の歴史の重みを皆で分かち合い、先人の功績を偲びながら同神社と地域の更なる発展を祈念しました。

京都教会ビデオレター6月号 配信中 ～東教会長発～

ビデオレター6月号が京都教会のホームページで公開されています。パスワードは各支部長にご確認下さい。
<https://rkk-kyoto.jp/archive1/20260601>



左記の QR コードをスマートフォンで読んで、ご覧頂くことも出来ます。地区単位、各家庭においても視聴し、1ヶ月の修行目標とさせて頂きましよう。

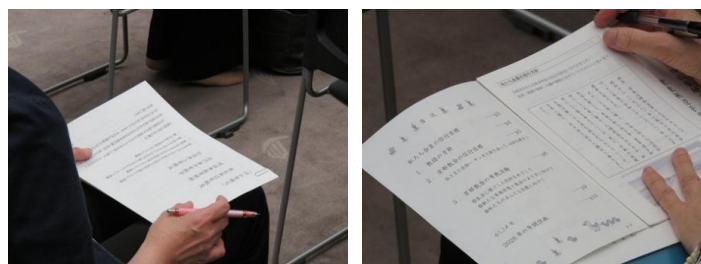
令和8年、私たちは「仏さまと出会い サンガと語り合っ て 心田を耕そう」を実践して参ります。京都教会のホームページもご覧下さい。<https://rkk-kyoto.jp/>（右のQRコードからご覧頂けます）



教師資格者勉強会 ～智慧を身に付け、人さまにその智慧を伝える役割～

教師資格者勉強会が5月10日、脇祖さまご命日の式典後に法座席で行なわれ、教師の有資格者150名ほどが東教会長の研修を受けました。

東教会長は研修の中で、教師資格者の大きな役割として、①教えを広めること、②信仰者を育てることであり『教会の大黒柱』だと述べました。また、教団は12月が年次スタートで5月末が1年の折り返しにあたることから、今年の教団方針を改めて確認し、12年後の教団創立100周年や2年後の90周年、そして京都教会の信行目標をふまえながら、「京都は特に日本の伝統を受け継いでいく」ことが大切だとしました。京都は南北に長く南の方は教会まで遠いという地域性やコロナ禍で宗教が不要不急になり“寺じまい”もする世相、また少子高齢化・宗教の伝達の難しさがある中でも『サンガのつながりの中で自分自身の信仰を深める』ことの重要性を述べ、『生活に根ざした信仰』など、立案した計画の実行性を確認しました。



行事などを実行する中で、教師資格者は『神通力』を身に付けること、そのために日頃からさせて頂くことが「四弘誓願」であると述べ、お釈迦さまの教えは苦を解決するためだけのものではなく“人格を変え、智慧を身につける教え”であり、教師資格者の神通力とはその智慧を身に付け、人さまにその智慧を伝える役割があるとしました。

最後に方便品の『難解難入なり』の一句にふれ、教師資格者しか分からない智慧の門に入れる資格を頂いている私たち、その智慧を自由に使えるようになって免許皆伝された私たち、自分自身で封印しているかもしれないが、お互い大いに発揮していきましょうと結びました。



休憩を挟んだ後“3人法座”が行なわれ、活発な話し合いがなされました。法座後の発表の中には「親戚で亡くなった人がいる。霊界で修行されていると思うと心が軽くなった」「子供たち、孫たちを大切にしたい。ありがたいと言える家庭にしていきたい」「神通力を身に付けることの大切さを学び、教師資格者しか務められない佼成葬のお役の有り難さを感じた」などがありました。

休

壮年部「春のつどい」 ～近況報告で讃嘆し合う～

京都教会壮年部は4月26日に「春のつどい」を開催しました。昨年は3月末に教会中庭で実施したものの、気温が低く寒い思いをしたため、今回は食堂を使用し30名ほどの参加がありました。

開催にあたり、東教会長は「今年は開祖生誕120年、開祖の思い出のお言葉として『壮年は前に出ることなく、女性・子供たちを支え、そして教会全体を力強く支えて頂きたい』と仰っていました。京都教会発足70周年に向けて皆さんと取り組んでいきたい」と述べました。昼食のお弁当を食べながら歓談し、一芸披露では京都の地名クイズやオカリナ演奏などで、いつもと

違った一面を見ることが出来、皆が楽しそうにしていました。

各自の近況報告では「地区の会長の役を頂いた。頑張っていきたい」、「教会の中だけで通用する人間になってはダメだと教えて頂いた。私たちは地域社会へ飛び出していきましょう」、「数年ぶりに壮年の仲間に出会えた」、「法座に参加していろいろ学べた」とするものや、中には自身の体の不調から「デーサービスに行くようになった。自分より年上の方から学ぶことが多い。足腰が弱るようなので自力で頑張るようにしたい」、「先日、腰を痛めてしまって、いろんな方に支えて頂いた」、「『ありがとう』という感謝の言葉を繰り返すことが体にも良いと教えて頂いた。頑張りたい」と発表される方、また「夏にもこのようにつどいをしたい」、「会社では重鎮の年齢になったが、教会に来ると先輩の皆さんがお元気。自分はまだまだ“鼻たれ小僧”だと感じた」、「60歳代後半はこのメンバーの中では若い。皆さんお元気。死ぬまでが成長だと思う」など、思い思いの発表に拍手を送り、約2時間のつどいは短く感じられお開きとなりました。

